

中川戸神楽団「茨木」photo by yuk☆kii

平成25年5月19日(日) 時

開場:12:00 開演:13:00 終演予定17:00

所 アステールプラザ中ホール

全席自由

前売券 2,000円 当日券 2,500 円

チケット販売

アステールプラザ・広島市内の各区民文化センター エディオン広島本店・ひろしま夢ぷらざ 北広島町観光協会

大和 葛城 宮乃木神楽団(広島市)

Щ 琴庄神楽団(北広島町)

茨 木 中川戸神楽団(北広島町)

大江山 琴庄神楽団(北広島町)

ログラム

# アステールフラザ神楽鑑賞会

やまと かつらぎ

## 1 (新作)大和 葛城 宮乃木神楽団

今からおよそ 2600 年前、神武天皇の御代、身の丈が低く 手足が長い土蜘蛛(つちくも)と呼ばれる氏族がいました。

天皇の軍は、土蜘蛛の根城を「葛(かずら)」で作った網を 使って征伐しました。これが、彼らが敗れた地である「葛城」 という土地の語源という説があります。

この時、征伐された土蜘蛛が精魂になり、後の平安時代、 都の守護・源頼光に妖術をかけて病におとしいれ、とどめを 刺そうと館を襲います。

頼光は、脇差の膝丸を抜いて土蜘蛛の精魂を撃退します。 そして、この脇差を蜘蛛斬丸と名を改め、討伐隊を率いて葛城山に向かい、土蜘蛛の残党を見事に退治します。

やまうば

## 2 山 姥 琴庄神楽団

信州明山(あけのやま)の山賊退治の勅命を受けた源頼光とト部末武(うらべすえたけ)は、山に入りますが、山中で迷ってしまいます。

そして一つの灯りを見つけ、一夜の宿を請います。この家に暮らす母子こそが、都を追われ世を呪い、山賊となって悪行を重ねる山姥とその子・怪童丸でした。

二人は、武勇の誉れ高い頼光とは知らずに襲いかかりますが、たちまちに敗れ、山姥は怪童丸を見捨てて逃げます。 しかし、すぐに立ち戻り、一命に換えて怪童丸の命乞いをします。

頼光は母子を不憫に思い、怪童丸を家来として都に連れ帰ります。

(怪童丸は、後に坂田金時と名乗り、頼光の四天王の一人になります。)

いばらぎ

## 3 (新作) 茨木 中川戸神楽団

平安時代中頃、京の都・一条戻り橋には毎夜鬼が現れ、都人は不安な日々を過ごしていました。都の守護・源頼光は、四天王の一人・渡辺綱に名刀「髭丸(ひげまる)」を授け、戻り橋へ鬼退治に向かわせます。

綱は鬼を取り逃がしたものの、その片腕を持ち帰ります。 これを陰陽師が占い、「七日以内に必ず鬼が取り返しに来るの で、その間、絶対に人に会ってはならない」と告げます。

そして七日目の夜、綱の伯母・真柴が会いに来ます。情け に負けた綱は、館に入れて鬼の片腕を見せます。

すると真柴は、魔性の本性を現し、鬼となってその腕を取り付け、虚空飛天の術で大江山へ飛び去って行きます。

おおえやま

## 4 大 江 山 琴庄神楽団

平安時代中頃、一条天皇の御代、丹波国・大江山に酒呑童子(しゅてんどうじ)という鬼が多くの手下を従えて立てこもり、里に出没しては悪事を働き、村人を苦しめていました。

天皇は大江山鬼神征伐の勅命を、源頼光に下します。

頼光は大江山に向かいますが、途中、神が現れて御神酒を授かります。

そして、一行が酒呑童子の岩屋へ急いでいると、都からさらわれてきたという紅葉姫に出会い、姫に岩屋へ案内させます。そこで童子と問答の末、宿を許されます。

一行は、携えてきた御神酒を童子たちに振る舞い、酔いつ ぶれたところで一気に斬り込み、大激戦を見事に討ち勝ちま す。

みやのき

#### 宮乃木神楽団(広島市安佐北区)

平成 10 年結成。

安佐町飯室の野原八幡神社を拠点に、幅広い地域から団員が参加し、練習に励んでいます。

阿須那系神楽を中心に郷土芸能として伝承するとともに、若手と 一緒に「神楽とは何か」を考えながら、先人たちが育んだ神楽の心 意気を学び、儀礼舞、旧舞、新舞を舞っています。

現在は団員も増え、保持演目は20演目を超えています。

きんしょう

#### 琴庄神楽団(北広島町)

昭和48年、庄原八幡神社と琴谷天日神社を氏神とし、神楽同好会を結成。北広島町豊平地区で神楽を習い、奉納してきました。

現在では、従来の神楽を伝承しながら、舞台芸能としての神楽にも取り組み、平成22年には創作神楽「厳島」を発表しました。

初心を忘れず挑戦する気持ちで、さらなる完成度を求めて取り組んでいます。

なかかわど

#### 中川戸神楽団(北広島町)

明治8年結成。

戦後、八調子の高田舞を導入し、神楽の保存伝承に努めています。 近年は「保存的伝承から創造的伝承」を謳い、アレンジを加えた オリジナル神楽を積極的に発表し、スーパー神楽といわれる照明や 面·衣装の早変わりが特徴の舞が有名です。

感動ある神楽をめざし、独自の創作力を養いながら魅力的な舞台づくりに取り組んでいます。